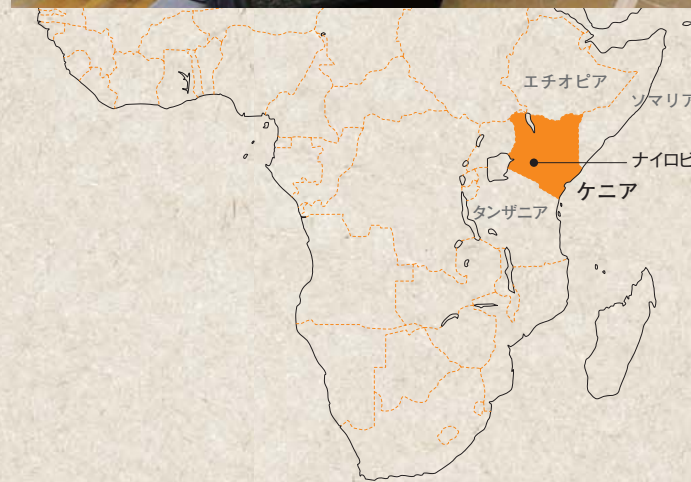




特別レポート

アフリカと日本に響き渡ったゆずの歌

ゆずとして、世の中の問題に向き合ってみたい —
1つの曲作りからスタートした「Wonderful World Project」が、予想以上の広がりを見せている。そして今、音楽に乗せたゆずの思いが、アフリカと日本の子どもたちの心に刻み込まれている。



アフリカで作った新曲「はるか」を初披露するゆずの二人

世界平和の願いを込めて

“**ダ** 焼け染まる 風に吹かれて
立ち止まる
同じ地球のどこかで この空を君も
見えていますか？”

アフリカで生まれた楽曲『はるか』。アコースティックギターの優しい音色と、心地よい二人の声が心に染みる。まぶたを閉じると浮かんでくるのは、赤茶けた大地、人々の涙、子どもたちの笑顔。「ケニアで出会ったみんなの思い出をつむいだ曲です」（北川悠仁さん）。

2008年春に「Wonderful World Project」がスタートしてから1年半余りの今年4月、東京都立川市立上砂川小学校で『はるか』が初披露された。目の前で奏でられる生の歌声に、600人を超える子どもたちはきき付けになった。

これまで数々の名曲を世に送り出し、多くのファンを魅了してきた人気フォークデュオ「ゆず」の北川悠仁さんと岩沢厚治さん。デビュー11年目を迎えた昨年、『ワンダフルワールド』を発表。JICAをはじめと

する国際協力分野の関係者に、開発途上国で起きている紛争や貧困などさまざまな問題について取材を重ね、出来上がった一曲だ。そして、「少しでも世の中に役立てば」と、楽曲の印税とツアーグッズの売り上げの一部を使ってアフリカの大地に緑を植える「Wonderful World Project」を開始。植樹を選んだのは、自分たちの音楽に欠かせない木製のアコースティックギターに感謝の気持ちを表したかったから。環境への恩返しこそ、ゆずとして「取り組む意味があった」。

ゆずとJICAの初コラボ

そのころJICAでは、世界10カ国の子どもたちが描いた「将来の夢の絵」が1冊の絵本としてまとめられていた。その絵は、05年4月に入社したJICAの職員たちが、1年目の海外研修で途上国に赴任している間、地方の学校や村などで活動する青年海外協力隊員らを通じて集めたものだった。その名も「こども夢プロジェクト」。「出発前に同期34人で話し合い、『業務以外に何か面白

いことはできないか」という声が上がったのが始まりでした」と、活動を中心的行った堀勝治郎職員は言う。集められた560枚の「夢の絵」は、堀職員らの母校の文化祭やJICAボランティアの募集説明会などで展示された。また、「絵を描いてくれた子どもたちにお返しをした

い」という当初の目的を果たすため、これを絵本にして子どもたちへ贈った。届けたのは、堀職員らの2年後輩に当たる07年度の新入職員だった。そんな折、JICAとの親交も深い、歌人の田中章義さんを通じて、思いがけない話が舞い込んできた。ゆずさんと何かコラボレーションで



(上) ゆずのコンサート「YUZU ARENA TOUR 2008 WONDERFUL WORLD」では、世界から集められた子どもたちの「夢の絵」が飾られた
(下) 村上隆氏が主宰するアートフェスティバル「GEISAI」でもゆずのブース内で展示されるなど、多くの人たちの目に触れた「夢の絵」



ケニアの孤児施設で子どもたちと一緒に将来の夢の絵を描いた北川さん



「Wonderful World Project」のきっかけとなった楽曲「ワンダフルワールド」を聞き入る上砂川小学校の子どもたち

きないだろうか――。

田中さんのサポートもあって夢のような話ほとんどん拍子に進み、ついにゆずの二人と会うことになった堀職員。そして二人から驚くべき提案が。「コンサート会場に世界中の子どもたちの夢の絵を展示したいんだけれど」。自分たちが集めた絵がこんな形で広がっていくなんて、考えてもいなかった。

しかし、自分たちで集めた絵は10カ国分。とても「世界中から集めた」とはいえなかった。そこでまたも活躍したのが海外研修中だった07年度の新人職員。彼らを中心に、世界各地で夢の絵の収集が始まった。

そのときすでに、コンサートまで2カ月を切っていた。世界中から十分な数が集まるか、不安もあった。しかし、そんな心配をぬぐい去るか



(上)ゆずの曲を披露する子どもたちの歌声を聞きながら一緒に口ずさむ北川さん。左奥が谷川隊員
(左)ブライアン君との対面に笑みがこぼれる北川さん。「夢の絵」の絵本とともに、自作の絵本「けばけば」もプレゼント



のごとく、わずか1カ月足らずで合計26カ国からたくさんの絵が寄せられた。その数なんと2000枚。想像以上の数だった。

こうして集められた絵は、ゆずのコンサート会場の入口正面に飾られたほか、『ワンダフルワールド』のバック映像やプロモーションビデオの中でも流された。「本当にうれしかった」と振り返る堀職員。ゆずとのコラボレーションによって大きな広がりを見せた「こども夢プロジェクト」の終着点に、達成感を得た瞬間だった。

「夢の絵」の作者に会いに

しかし、これで終わりではなかった。09年春、プロジェクトを代表して北川さんは、アフリカ・ケニアに向かった。目的は、自らの手で植樹をすること。そして、「夢の絵」を描いた子どもたちに会うことだ。

「夢の絵」を描いた一人、ブライアン君は、首都ナイロビから北に約50キロ、ティカ市にある孤児施設で暮らしていた。HIV／エイズで親を失ったり、親から虐待を受けたりした子どもたちの保護施設で、青年海外協力隊が運営面をサポートしている。

「教師になりたい」という将来の夢を描いたブライアン君との対面に、

あふれんばかりの笑顔を見せる北川さん。以前からストリートチルドレンへの関心が高かった北川さんにとって、この時の感慨はひとしおだったことだろう。北川さんは「アサンテ（ありがとう）」の言葉とともに、「夢の絵」の絵本をブライアン君に手渡した。

そして施設を後にしようというとき、子どもたちからサブライズが待っていた。なんと、ゆずの『友達の唄』の大合唱が始まったのだ。施設で活動中の谷川武志郎隊員の提案で、歌の練習に励んだ子どもたち。2曲目の『またあえる日まで』では振り付けまで披露してくれた。まさかのうれしいプレゼントに感激を隠せない北川さんは、子どもたちと一緒に歌って歌い踊った。

「ありがとう」が言いたくて

ケニアでは、達成感、無力感、自分の甘さ、音楽の力など、さまざまな思いが頭をめぐったという北川さん。初めてのアフリカ、はるか遠いアフリカ。「行く前は不安もあった」という。

しかし、そんな彼を勇気付けたのは、出発前日に見た一本のビデオ。モニターに映っていたのは、『ワンダフルワールド』を歌う上砂川小学校の子どもたちの姿だった。

こうして、上砂川小学校の体育館で行われたゆずのミニライブ。『ワンダフルワールド』に続き、ケニアで産声を上げた『はるか』も初披露された。静かに始まるローテンポな曲を聞きながら、子どもたちは「はるか」遠いアフリカへ思いをはせる――そんなひと時となったはずだ。

約1年半にもわたったゆずの「Wonderful World Project」。音楽に乗せた二人の思いは、アフリカ、そして日本の子どもたちの心に深く刻み込まれた。